
俺と優

克也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と優

【Nコード】

N0898W

【作者名】

克也

【あらすじ】

どこにでもいるような中学生、秀。

しかし彼には超能力という普通の人間とは外れた力を持っていた。ある日彼はある女の子を助ける。その出会いがすべての始まりだった・・・。

超能力と恋の新感覚小説！（？）

この物語にはポケモン擬人化が少し含まれています。苦手な人はブラウザBACKでお願いします。

俺と優 第1話 出会い（前書き）

克也の小説2作品目、俺と優です!!

あ、この物語と俺の書いてるほかの物語のキャラクターはすべて関係ありません。

俺と優 第1話 出会い

ピピピ...

五月蠅い目覚まし時計の音と共にこの話の主人公、秀は起きる。

秀「うう、五月蠅い...」

そして、朝ご飯を食べ、秀の通う中学校へ行く。

普通に授業を受けて、部活して、外を見ながら今日は晴れてるなとか雨降ってるけど帰り大丈夫かなと思う。

ふつーでつまらない毎日。

...でも秀はそれが結構好きだった。

そんな秀にもみんなに隠している事があった。

それは彼が最強（自称ではない）の超能力者だと言う事。そしてESPカンパニーの社長である事。（記者会見などで、TVにできるときは社長としての姿にしている）

前者も後者もみんなはいささか信じられないだろう。だがこれらは全て事実なのである。

そんな秀が学校の親友、中満と学校から帰る途中のところからこの話は始まる。

秀「それじゃ、また明日な〜部活来いよ〜」

中「いつも来てるじゃないか!!!まあいーや。それじゃな〜」

秀は中満と別れ、家の近くの歩道を自転車走って行く。

秀「あゝ疲れた〜ってあ、危ない!!!」

?「うわっ、あの、た、助けて!」

?「いたぞ!あいつを捕まえろ!」

女の子を捕まえようとしている黒服の男二人は赤色のネットを手から出した。

秀「な、なんなんだよ!でも向こうが超能力を使っつて事は俺も使っつていいって事だよな」

秀はニヤリと笑い、自転車から降りて、手を前に出した。

秀「バリアー！」

秀がそう言うのと秀と女の子の周りにドーム型の透明の壁が出来て、飛んできたネットがそれに当たると消滅した。

？「な、なんだと！！」

秀「ロックー！」

黒服の男達は身動きがとれなくなる

秀の攻撃はそれでも止まらない。

秀「このESPカンパニー社長の俺を敵にまわすとはお前らは運が悪いな。回転！！」

すると黒服の男達の周りに竜巻が起こり彼等は飛ばされて言った。

秀「ふうー、また疲れたな。君、大丈夫か？」

優「あ、ありがとう。私は優です」

秀「俺は秀って言うんだ。そういえばなんであんな奴らに追われていたんだ？」

優「それは…」

秀「あ、ちょっと待って、意味不明だろうけど優って以心伝心使える？」

優「それなら出来るわ」

秀「良かった。んじゃ、続けてくれ」

優「わたしは他の次元からきた者だからよ」

秀「そうなのか。それなら話は簡単だな。その次元位置を教えてください。送ってやるよ」

優「それがそうも行かないの。その次元でも敵に追われていてここに逃げたと思ったたらまた変なのに追われていたのよ」

秀「そうか。それなら家に来いよ。守るなら出来るしな」

優「あ、ありがとう」

ちょうど戦闘した所から家は近かったのですぐに着いた。

秀「家に入る前にお前にAロックをかけておこう」

優「え、Aロック？もしかしてあの人達みたいに動けなくなるの？」

秀「いいや、ロックとは違ってこれはかけられた者はかけた者以外

から姿が見えなくなり声も聞こえなくなるってものだ」

優「へえ」

秀「まあいいや。とりあえずかけるぞ…ほれ！」

秀が両手の掌を優に向けるとそこに魔方陣が現れた。その中心にはアルファベットのAがあつた。

秀「よし、オッケーだよ」

優「…なんか不思議な感じ」

秀「とりあえず入ってくれ」

ガチャ

優「お邪魔しまゝす、と言っても秀君にしかきこえないけど」

すると玄関の右側の部屋からおじいさんがやってきた。

？「お帰りなさい」すーくん、今日はカンパニーの会見があるよ、あれその方は？」

秀「アラタマの奴らに追われていたところを助けたんだ。とりあえず検査してあげて」

優「あれ秀君意外は見えないんじゃないの？」

秀「ちよつと例外があつてね、俺が許可した人はみえる仕組みの口ツクなんだ。それじゃ中山さん、あとはよろしく」

中「分かりました。それではそちらの方、名前は？」

優「優です」

中「わたしは中山と言います。それでは優さん、こちらへ」

秀「それじゃーね」

秀は優と別れた後、二階にある自室で私服に着替えた。

秀「記者会見か…面倒だな。でもこれも社長としてのつとめか…」
そう言つて秀は手を上にあげると姿が変化し、オレンジの髪（長さは腰くらい）に黄色のチェックの服にスカートがピンクに下の方に白いラインがはいった物をきた20代くらいのかわいい女の人になった。

秀は元の姿ではいけないのでこの姿で社長になっている。
（ちなみに知っているだろうがこの時名前は結花である）

結「それじゃ、行きますか」

結花は転送を使い、会場のESPカンパニー本社へ行った。
「記者会見の会場にて」

カシヤカシヤッ

カメラのフラッシュが出る会場に結花は入場して来た。

結花が椅子に座ると会見が始まった。

司「それでは記者会見を始めます。今回はここESPカンパニーの新製品について説明してもらいます」

結「今回我が社で開発中の製品はこのテントです」

記「そのテントは外見が普通のテントにしかみえませんが何か違う所があるのですか？」

結「それはテントの中がとても広く、中の設備が家のようにキッチンやベッドルームがあるのです」

記「この会社ではその製品をどんな時に使って欲しいと思っていますか」

結「それは災害時です。災害が起こって家が壊れた時、仮設住宅として使って欲しいです」

司「他に質問はありませんか。それでは会見を終わります」

会見が終わり、結花はカンパニーを出て、家に戻るところだった。ちなみに転送を使わないのは彼女の両親に帰り位は歩いて帰るよう言われているのだ。

カンパニーを出て、すこし歩いたところで、携帯が鳴った。

ピッ

結「もしもし、あつ、中山さん？うん、検査終わった？…ふん、変なトコはなしね…。分かったわ。ありがとう。それじゃ」

ピッ

持っていた携帯をしまおうとするとまた鳴った。

結「はい、何？お母さん。うん、今はこの姿なの。…買い物？いいわよ、それじゃメールで教えて。…お金？今月もらった分があるから大丈夫よ。うん、わかったじゃね」

結「買い物か：なんか久しぶりだな」
そうして結花は近くのスーパーへ行く道を歩いて行った。

俺と優 第2話 結花と優

「優と出会ったその日の夜」

結「ふうー。ただいま」

母「おかえりーすーkじゃなくてゆいちゃん」

結花が帰って来てから、夕食を作り、食べた。

優は中山さんの紹介で秀の母を知っていたので、ほとんど岩月家の一員であった。

優「もぐもぐ… 所謂えばお母さん、秀君は？」

母「うーん。多分下でお祖母ちゃんと一緒に食べてるんじゃないかな」

優「へえー。一緒に食べれば良いのに」

優は夕食を食べ終え、秀の部屋でラジオを聞いていた。

優（そついえば秀君と結花さんはどういう関係なんだろう？ 多分姉弟なんだろうけど…）

コンコン

結「秀ー入るわよ。あ、あなたは… 優ちゃん、だっけ？」

優「はい、優です」

優の自己紹介を聞くと結花はクスツと笑い、自分の自己紹介をした。

結「私は結花よ。よろしく、優ちゃん」

優は気になっていた事を結花に聞いた。

優「あの、結花さんと秀君は姉弟なんですか？」

結「ううん。でもそんな感じ。私と秀の事は秀が教えてくれるわよ」

結花は最後にまたね、と言って部屋を去って行った。

優「秀君が教えてくれる、か…。所謂えばもうお風呂の時間だ」

優は一階の風呂場へ行った。

優「はあー。温まるー。お風呂って良いわね」

ガラガラ

秀「風呂っ風呂っ」 あったかい風呂っ」

秀は風呂場の入口に差し掛かる所で優と目線があった。

……二人の顔がみるみる赤くなっていく。

秀「…ご、ごめん…戻るわ」

優「…いい、いや、…べっ、別にいいよ。入っても。秀君、寒そうだし」

秀「いいの？じゃあ入ろっかな」

秀が体を流し、湯船に浸かる

ちなみに風呂場は秀の力でかなり広くなっている。

優は気になっていた事を秀に聞いた。

優「ねえねえ、秀君と結花さんってどういう関係なの？」

秀「ん？ああ、姉さんと俺の事？うーん、同一人物かな…」

優「へ？どういう事？」

秀「口で言うより目で見た方がいいな」

そう言っつて秀は手を上にあげた。

すると秀の体に変化し、結花になった。

結「こういう事なの。理解してくれた？」

優「へえーそうなんだー。結花さんってどういう時に秀君になった

りするんですか？」

結「うーんと…、その時の気分や状況で使い分けてるわね…」

優「もしかして、他にもいたりするんですか？」

結「うん、秀が本当の姿で、カンパニー社長としての姿が私で、小説家としての姿と、秀の双子の妹の姿の4人ね。ちなみに小説家の姿の名前は克也で、妹の姿の名前は愛夏よ」

優「結花さんって結構大変ですねー。機会があったら他の姿も見せて下さいね」

優が感想を述べるといつの間にか秀は元の姿に戻っていた。

秀「別に大変って訳じゃないよ。俺とは違う人生を生きてるって感じがするからね。…あっ、面白い事考えついた」

秀はニヤリと笑った。

優「何を思いついたの？」

秀「中満に少し悪戯をしてやろうかなーと。ね」

秀は風呂を出るまで終始ニヤニヤしていた。

風呂に入った後、秀達は部屋で寝る準備をした。

秀「さて、寝ようかな。…あっそういえば優の布団を出していないかったな」

秀がタンスから布団を出そうとした。

優「あ、あのさ、一緒の布団で寝て…いい？」

秀「え？ええええ！！いい、良いけど…でもなんで？」

優「なんか夜って怖くて。それと…その…秀君の事が、…す、好き…だから…」

秀「まマジでー！！！！」

秀の声が家中に響き渡った。

秀「実を言うと俺も優に一目惚れしてさ…なんかうれしいな…」
かくして秀と優は寝た。

しかし、秀は布団に入ってもまだ寝ずに、SITのモニタを見ていた。

秀「…ぼそぼそ…そうか、やっぱり優は…だったのか…俺の考えは合っていたな…」

熟睡していた優は秀の呟きなど聞いていなかった。

俺と優 第2話 結花と優（後書き）

少し恥ずかしいです。最後の描写は。

ちなみに風呂では湯気がちゃーんと仕事をしてくれたので隠す部分は隠れていたそうです（秀君談）

第3話 優の正体と秀の力 前編

「次の日」

秀「ふああー、朝だ」。ゼクロムの優ちゃん、おはよう」

優「お、おはよう。な、何の事？」

優は慌てていた。

それに加え、ポニーテールにしていた髪をおろし、顔を紅潮させていたので物凄くかわかった。

秀「ちよつと悪いけど、優ちゃんについて調べて見たんだ。ここのカンパニーの人でもないのに以心伝心が使えるからね。で、調べて見たら異次元座標PKMOの住人でしかもゼクロム。びっくりしたよ。今言った事に間違いはあるかい？」

すると優は自分の力を使って漆黒の翼を出した。

優「合っているわ。ごめんなさい隠していて」

秀「別にいいよん。それにしてもどうした？顔赤いけど…」

優「ううん、何でもない」

優は翼を戻した。

ちなみに何故優の顔が赤いかと言うと、秀は寝る時抱き枕を使うのだが、優と寝る時に邪魔だったので使わなかったら、優を抱き枕と間違えて抱いてしまったのである。

秀「ふゝん何でもないならいいけど」

今日は土曜日。秀はカンパニー社長として出社する日である。

秀「優ちゃん、今からカンパニーへ行くけど優ちゃんも行く？」

優「うん、一緒に行くわ。楽しそうだし」

かくして二人はカンパニーへ行った。

秀は移動中も結花の姿である。

優「結花さん、そういえば昨日中満君に悪戯をするって言ってたけどなにをするんですか？」

結「ああ、それ？ふふふ。それは…内緒よ」

それから少し歩いて目的地に着いた。

結「優ちゃん、これからカンパニーに来る時は私の妹って事にしてくれる？」

優「はい。分かりました」

結「ありがとう。ここにいる時は私の事はお姉ちゃんって呼んでね。じゃ、行こっか」

結花達はカンパニー内へ入って行った。

ウーン

受付「おはようございます結花社長。あの、その娘は…」

結「私の妹よ。当分お母さん達が仕事で家を空けるから、来る事になったのよ」

優「優です。少しの間よろしくお願いします」

受付「そうですか。なら良いですよ」

それからエレベーターで30階の社長室へ行った。

優「うわぁー！すごい！お姉ちゃんってこんな所で働いているんだー！」

結花達のいる部屋には秘書がいるので優は妹口調である。

結「ちよつとここは高いからあまり好きじゃ無いけどね。はい、優ちゃんにこれを渡しておくわね」

優が渡されたのは1枚の地図だった。

優「これは？」

結「それはここの地図。暇だったらそれ見ていろいろ探検するといいわ。×印のある部屋は行っちゃだめよ」

優「はい」

優が部屋を出て行くと結花は秘書の勝並に話しかけた。

結「勝並、あなたって超能力で本当の姿を隠してるでしょ。ちよつと調べさせてもらったわ」

勝「何故それを？」

結「だってあなたの名前、簡単なアナグラムになっているもの。『かつなみ』を少しいじると『なかみつ』になる。中満と言ったら私

の知り合いは一人しかいないからね」

すると勝並は自分の力を使って中満の姿に戻った。

中「ご名答。でも何故それを？」

結「それは…こういう事よ」

結花は手を上に挙げ秀の姿に戻る。

秀「まあ、こういう事だ。分かったか？中満」

中「…へえ。そうだったのか。ちよつと驚きだな」

秀「とりあえず、優が戻る前にさっきの姿に戻らなきゃいけないな」

秀と中満はそれぞれさっきの姿に戻った。

勝「そういえばなんでお前はその姿で社長になったんだ？」

結「うん。ええと、たしかこの会社を作った時に女社長だと面白そうだな…って考えたのが始まりだったわね」

勝「立て続けで悪いけど、あの娘は何者なんだ？人とは思えない何かを感じたんだが」

結「ちよつとあつてね。うちにいるの。説明はするから会社内では私の妹で通してね？」

勝「OK、教えてくれ」

結花は勝並に昨日あった事を話した。

勝「ふうん、異次元の住人、か…不思議な拾い物をしたなお前」

結「拾い物って、あんた酷いわねえ…。もうちよつとなんかないの？」

勝「悪かった。でもお前って姿変わると話し方まで変るな…。性格は変らないけど」

結「そりゃ秀の時は男だけど今は女ですから。話し方だって変るわよ」

結花と勝並が話しをしていると優が戻って来た。

優「ふうー。お姉ちゃん、ここいろんな部屋があるね…楽しいな」

結「優ちゃん、ここにいる勝並には事情を話してあるから普通に話しているわよ」

優「はい。はぁー疲れた…人の妹になりきるのは結構大変ですね」

」
結「それをほぼ毎日やっているのよ。私も、勝並も。まあ、私達は妹じゃあ無くて別人だけど」

それから、結花と勝並は仕事。優は部屋でのんびりした。

」数時間後」

結「あら、もう12時なの？随分と時間が経つのが早いわね」

優「本当だ。気付かなかった」

勝「腹も減ったし、食堂に行って昼飯でも食べるか。今日は俺が奢るよ」

結花達は1階にある食堂に向かった。

結「やっぱりここの豚骨ラーメンは美味いわね」。何度食べても飽きないわっ」

優「サンドイッチも美味しいですよ」

勝「ここのメニューは全て安くて美味しいからな。俺的にはカレーが一番だけど」

三人は好きな物を食べている。

（当然昼飯代は勝並の奢りだ）

昼食を終え、三人は社長室へ戻った。

その途中…

結「あゝ美味しかった」

優「ですね」

二人が仲良く話している中、勝並は神妙な顔をしていた。

結「ねえ、勝並。どうしたの？そんな顔して」

勝「…ぼそぼそ…なあ、結花。気付いてるか？」

結「ああ、その事？そりゃ分かっているわよ。私を誰だと思っているの？」

二人は立ち止まり、後ろを向いた。

勝「やっぱお前は変わらんな。優ちゃん、ちょっと下がっててくれるか？」

優「え？あ、は、はい。分かりました」

優が二人の後ろに下がる。

結「バリア」

すると優を囲うようにバリアが張られた。

勝「空間隔離！」

勝並がそう言うのと周りの空間がグニヤリと歪み、全面白色のとてもなく大きい部屋と姿を変えた。

その空間には優と勝並と結花――

結「久しぶりね。こんな所まで堂々と来て何の用かしら？アラタマの幹部、刈谷さん」

――と、そこにいたのは刈谷と呼ばれた男の人がいた。

（第4話へ続く）

第3話 優の正体と秀の力 前編（後書き）

次は第4話！！もうすぐ学校がメインになってきます。

これからの設定で言っておきたいのが秀君はバレーボール部です。
ではまた～

第4話 優の正体と秀の力 後編（前書き）

今回はツッコんだら負けの話です。

第4話 優の正体と秀の力 後編

結「久しぶりね。こんな所まで堂々と来て何の用かしら？アラタマの幹部、刈谷さん」

そこにいたのは刈谷と呼ばれた男の人だった。

刈「おや、あなたは結花さんではありませんか。どうしてこちらに？」

結「聞きたいのはこつちね。この廊下の先は社長室よ。多分優ちゃんのことについてだろうけど、おあいにくここはESPカンパニー。社員の超能力力は2倍になってそれ以外の超能力は半分になる境界が張つてあるの。意味が分かるわよね」

結花が2丁拳銃とバズーカを、勝並は一本の太刀を転送させる。

刈「はて？良く分かりませんな」

結「そ、じゃあそこにいる頭の固いおじさんに教えてあげる。つまり……」

結花が秀の姿に、勝並は中満の姿に戻る。

秀「てめえが殺されるって事だ。じいさんよお……！」

中「いくぞ！秀！」

秀「そんな事、わかつてらあ」

秀と中満はテレポルトし、刈谷の背後へ移った。

秀「雷神・二重撃奏」
デュアルランチャー

秀が放った二つの弾はかなりの威力で刈谷めがけて飛んで行った。

刈「読めてますよ……バリア」

中「じゃ、物理攻撃にお前のバリアは耐えられるかな？」

刈「ふつ、耐えられるに決まっているじゃ無いですか。だから子供の過剰な自信には困……」

中「子供だと？はっ、俺達はただの子供じゃない。俺達は……」

中満の太刀が刈谷のバリアを割る。

刈「なにっ……！」

秀・中「俺達は世界1、2の超能力者だ!!」

バリアが破壊され、刈谷は秀の攻撃を受けた。

刈「ぐはっ」

秀が背中に背負っていたバズーカを構え、安全装置を外す。

秀「雷光を司る龍よ。その速さで敵を翻弄せよ。雷龍・雷撃砲」

追い討ちと言わんばかりに刈谷はまともに食らい、消えた。

秀「やっぱり囧だったか」

中「とりあえず部屋へ戻ろう。話は後だ」

秀も中満も、結花達の姿に戻り、結花は部屋で連絡を取っている。

結「それで…ええ、とりあえず殺ったわ。…囧だったけど。目的は多分優ちゃんの件ね、あの娘異次元の住人だし。昨日電話で説明したでしょ。…ええ。…検査したけど何も無かったし。…うん、分かったわ。じゃあよろしく」

優「あの、私の名前が出て来たんですけど…」

結「それを今から説明するわ。あ、勝並、特攻部隊の綾坂が事務室に来る様言ってたわよ」

勝「はあ？特殊部隊の事務室？…あそこここから遠いんだよね」。

じゃあ行つて来る」

勝並は社長室を出て行つた。

結「さて、優ちゃん。さっきあった事について教えてあげるわね」

優「はい、お願いします」

結「まず、私達超能力者は3つの勢力に分かれているの。ここESPカンパニーもその一つよ。残り二つはさっき来ていたアラタマと言う組織と創造力と言う組織よ。ここまではOK?」

優「はい、大丈夫です」

結「じゃあ次行くわね。で、最近は創造力と私達ESPカンパニーは意見が合う様になって、合併の道を進んでいるんだけど、もう一つの勢力、アラタマが厄介なのよ」

優「何が厄介なんですか？」

結「いい？覚悟して聞いてね。アラタマは自分達が異世界を支配す

るとか言ってこっちの世界に来た異世界の人を捕まえては解剖したり他の化物に改造するのよ」

優「…うわぁ。想像したら寒気がしてきた」

結「私も聞いたら寒気がしたわ。でも大丈夫、優ちゃんは絶対に私達を守るから。」

優「はい！ありがとうございます」

優は満面の笑顔で言った。

ガチャ

勝「結花、ちよつと連絡」

それからまた仕事をして3時頃。結花達は帰った。

結「今日も大変だったわねー。…いろんな意味で」

勝「そうだな。あ、お前の家ってこの辺だろ？俺こっちだからさ。じゃあな、また明日」

結「ええ、また明日ね」

勝並と別れ、秀に戻った後、事が起こったのは突発的だった。

それは家に帰ってから1時間後だった。

秀「優」

優「何？秀君」

秀「いいか、今からお前にテストをしてもらう」

優「へ？ちよ、ど、どういう」

気がつくとき秀の部屋は学校の教室になっていた。

秀「内容は…とりあえず俺が学校で習った所まで。教科は5教科。

時間は…1教科につき1時間だ」

優の座っている席に国語のテストが出される。

優「は、はい」

優が机の上にあったシャーペンを手取る。

秀「それじゃ…始め！」

優は言われるがままに国語、数学、理科、社会、英語のテストを解いた。

PM11:00

秀「11時か、それじゃ終わり！」

秀の合図と共に教室は秀の部屋に戻っていた。

優「ふうー疲れた。でもなんでテストをやったの？」

秀「ん？ああ。優を守るに当たってなるべく俺とか俺の仲間がいる所にいて欲しいから。要は俺の近くに居てくれて事だな」

優「ふん。あ、テストの結果どうだった？結構分かる問題ばかりだったんだけど」

秀「うん、テストした順番に87、86、90、85、91って感じ。これだと学年で30番は入れるな」

優「おお。ちなみに秀君は？」

秀「88、79、90、85、89で55番だったな。よし、月曜日から転校生として俺の通ってる学校に登校してもらいまーす。クラスは俺と同じ4組で、席は…多分俺の隣が空いてるからそこかな」

優「はい」

秀は携帯を取り出し、電話した。

秀「中山さん？…うん、優の事なんだけど…うん、そうそう、俺のクラスで…うん、よろしく。あ、転校生としてね。明日学校に行くからその時に話しに行くって感じで、…うん、じゃあ」

次の日…

秀「うん、良く寝た…。んなつ！」

秀が目を開けると目の前に優の寝顔があった。…至近距離に。

「少しの間秀と心の中の天使と悪魔のやり取りをお楽しみ下さい」

秀「か、かわいい…」

悪「こんな事滅多にないぜ？キスしちゃえよ」

天「駄目だよ！好きな人同士でもまだ3日しか経って無いんだよ！そんな事したら嫌われちゃうよ！」

優「ん…」

優の口から吐息が洩れる。

俺と優の顔の距離は20cmほど。これはあれのチャンスじゃないか！？

悪「ほらほら、早くしないと起きちゃうぜ？」

天「だめだつて！君は優ちゃんに嫌われたいのかい？」

ああもう、五月蠅い！俺は俺のやりたい事をする！

悪「ふ〜ん。じゃあ俺達は黙っていることにしよう」

俺は枕元の携帯を手で引き寄せ、カメラモードにする。

パシャ

そして優の寝顔を撮り、保存つと…。待受設定で優の寝顔を待受にしよう。

秀「よし、着替えるか」

秀が着替え終わると、優も起きて来た。

優「んにゅ…おはよう」

秀「ん、起きたか。おはよう。…ほれ、これ着替え。着替えたらリビングに来て」

秀が部屋を出て行くと、優は渡された服を広げた。

優「これって…制服？だよね…」

優は着ていた寝間着に手を掛け…（これ以上描写すると18禁になってしまうため省略させていただきます。）

優は渡された制服に着替え、秀のいるリビングへ行った。

優「おはようございま〜す」

リビングには体操服姿の（上は白T）秀がいた。

秀「おはよう、優。お、制服似合ってるな〜。あ、朝は何食べる？パン？ご飯？」

優「んー、じゃあご飯で」

ちなみに秀の両親は結婚20年目の旅行で、1ヶ月ヨーロッパの旅をするために昨日家を出発したので不在だ。

朝食を食べ終え、二人は家の裏の駐車場へ行った。

優が裏口で待っていると、秀が新品の自転車を引きいて来た。

秀「これが優の自転車。俺の家は学校の自転車通学範囲だから通学にはこの自転車を使つて。本当は自転車通学許可証が必要だけど、転校してから当分は許可証なしでもOKだから」

優「うん、分かった」

秀も自分の自転車を準備をして、裏口まで来たので優も自転車に乗ろうとする。

秀「ストップ！とりあえず、体操服は着たよね？」

優「え？あ、いや…着てないけど…」

秀が溜息をつく。

秀「ええと、女の子は制服の場合、体操ズボンになるの。…まあ、今日は特別だ。テレポートを使おう」

秀はテレポートを使い、秀の通う中学校へ行った。

（第5話へ続く）

第4話 優の正体と秀の力 後編（後書き）

どうでしょうか？

何故優ちゃんがほかの世界の住人なのにこっちの世界の社会ができるのかとか考えてはだめですよ？

次回からおもに学校が物語の舞台となります。
お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0898w/>

俺と優

2011年10月9日14時57分発行